

庚

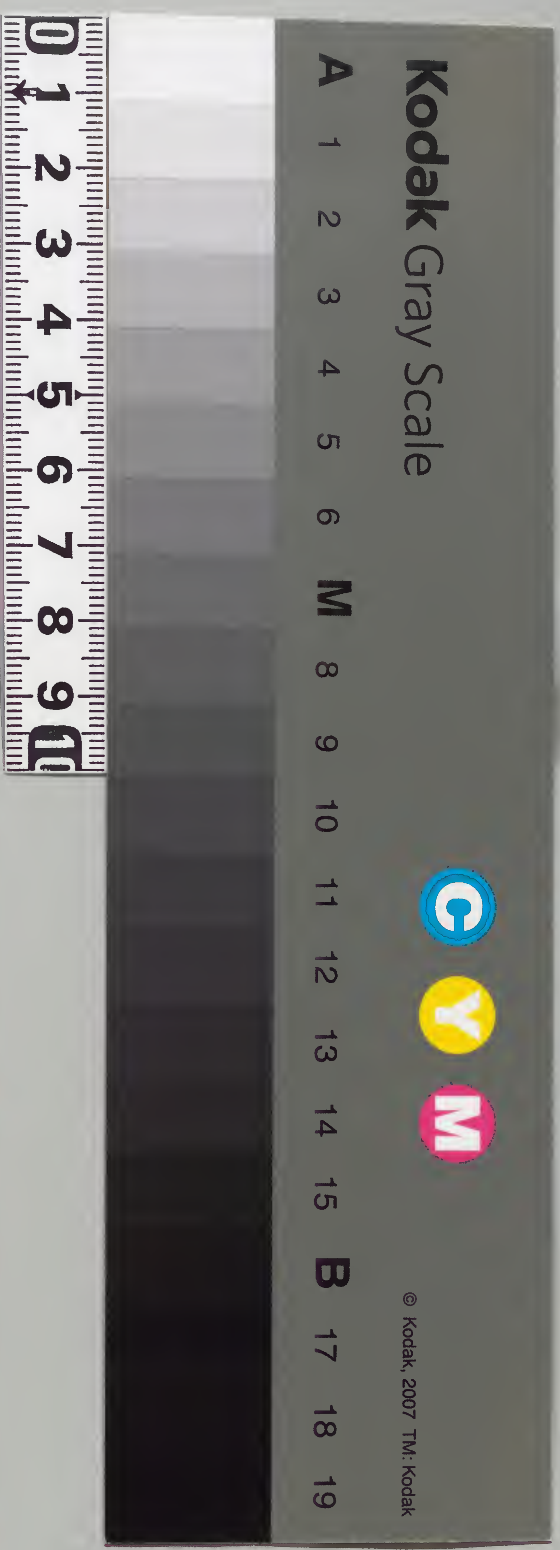
武家名目抄 職名部五上

第十冊

共六十

庫	文	閣	内
五	三	三	和
函	函	六	書
四	一	〇	
一	九	九	
五	一	一	
五	號	冊	類

内閣文庫	
番號	和 36091
冊數	60 (10)
函號	153 276

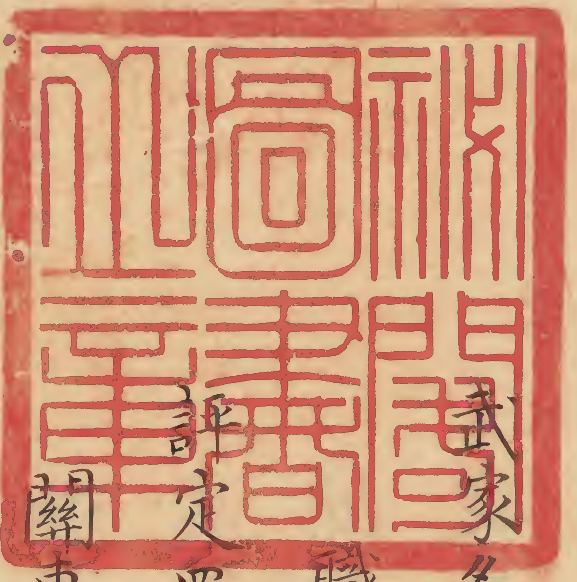


岡 241

評定衆
寄合衆

式評定衆

十之目



武家名目抄第十冊
職名部五上

關東評定傳云嘉祿元年乙酉七月二位家薨逝以後被

始評定執權相摸守平朝臣時房武藏守平朝

臣泰時評定衆助教中原師負駿三浦河前司平

義村二階堂隱岐守藤原行村法師法名出中條羽守藤

原家長町野民部大夫三善康俊問注所民部大

夫藤原行盛政所民部大夫三善倫重後藤

門尉藤原基綱太田蕃允三善康連佐藤相摸大掾

藤原業時齊藤左兵衛尉藤原長定法師法名淨圓

吾妻鏡云嘉禎元年五月廿二日甲寅上野

介藤原朝光加評定衆

又云延應元年三月九日癸酉改所造畢之

間今日有吉書始儀前武州布衣以參給評

定衆前攝津守師負藏人大夫入道西阿以

下參上廿九日己亥匝作前武州著評定所

給評定衆等參進管根山別當興實與知藏

三郎法橋良實遂對決

又云建長六年十二月廿三日辛卯評定衆

并可然大名外之輩者云出仕云私出行不

可具騎馬共人凡非晴儀者僮僕之負可減

定之者普可相觸之由所被仰付侍所司等

也

又云文永三年三月六日己亥諸人訴論事
被止引付沙汰問註所召整訴陳狀可勘申
是非也前々被記申詞之間為被賦九人評
定衆所被結番也御評定日々奏事結番次
不時章一番三日十三尾張入道見西越前前司
同時家廣宮内權大輔時秀伊賀入道道圓和泉
時廣行方入道行空二番日十六十六越後守實時中務
權大輔教時出羽入道道空信濃判官入道行忠

十之二

行一對馬前司倫長三番日十日廿秋田城介
泰盛縫殿頭師連少卿入道景頼心蓮伊勢入道行綱
行願一番衆一日十日二番衆五日廿三番衆
十一日政所問注所行實 康有兩執事每日可令參也
且自問注所每日可差進文士二人也按本
載九人評定元云とありて結番交名十八口人を
裁りし只ふ了番毎了三人ハ云之職了て自條ハ法職
不付き也

太田康有記云建治三年六月十七日為源

訪左衛門入道奉被作云陸奥左近大夫將

義宗

監所被加評定衆也可書進御教書云々

新式目云改替事正應六五任先例可被召

廿五評

評定引舟衆并奉行人等起清文且不可取

賄賂之由可被召并行人抵狀於各足之輩

者可有法恩至庶直之仁可被賞翫款

太平記云長寄新左衛門尉意見條持明院殿ヨリ内々

關東へ御使ヲ下サレ當今御謀叛ノ企近

十三

日事已ニ急ナリ天下ノ亂近ニ有ヘシト

仰ラレタリケレハ相摸入道々ニモト驚

テ宗徒ノ一門并頭人評定衆ヲ集テ此事

如何有ヘキト各所存ヲ問ル按已上八條云々
蘆倉右軍家乃

所司
不

庭訓往來云引舟同注而上裁勅判ト雖矣見

議定之趣評定充以下可注給之

梅松端云或時為評評所合在之師直茶

故評定之存と好多しして沙汰規式少く定め

られず梅本建武式目のとこといりあ初と
号氏直義ありか書と考つる巻尾

題せし人数を初民初は是圓俗名真意玄惠法系を定
む武明石民初大夫を田七布左衛門尉布施彦之師入道
以上八人あり武以下を
謙余級の時より評定元の家あり

太平記云北叡山
開闢條將軍左兵衛督ヲ奉始高

上杉頭人評定衆ニ至ル迄廿テハ山門十

クテ天下ヲ治ル事有マニカリケリト信

仰シテ武家増ニ寄進ノ地ヲ被副ケル

御評定着座次第云評定衆列執權上例文

和三年五月廿日評定始也今日評定當參

石橋左衛門入道心勝仁木左京大夫頼章

朝臣佐渡判官入道道譽土岐大膳大夫頼

康二階堂大截少輔政元問注所美作守顯

行披露奉行也按頼章が執事心勝を
号五人を評定元なり

又云永和四年正月十一日於出世評定衆

者盃飯期子出云々

花營三代記云應安五年正月十一日齋藤
右衛門入道被召加評定衆訖三月十二日
布施彈正大夫入道可為評定衆之由被仰
出之

鹿苑院殿御元服記云應安五年十一月廿
二日御判始御祝次第御引出物御劔御馬
管領進上之次御評定衆俗淺黃直垂
法躰衣如常
伊勢家記云應永卅年正月十一日御評定

有管領出仕衣袴也攝津左馬助滿親波多野
因幡入道元昌問注所刑部少輔康雄太田以
上三人評定衆也

康富記云嘉吉二年八月廿八日丙辰或語
云飯尾肥前入道永祥者評定衆也去廿二
日御評定始日與頭人波多野出雲守座席
令相論也為評定衆上者任位階上首可著
頭人出頭上之由肥前申之出雲申云雖為

蓋補せしはくまふまき忠意全く坂軍を
しし上首人哉指揮させしやあ為ふふし
さうれども本文忠こくく座席の端出さしを
えはて位階を下ふふものも多しはうまを改人子
ふさししこころり
ししこころり

又云寶徳元年十一月九日甲寅武家御評
定始也管領畠山左衛門督入道出仕也頭
人問注所加賀守攝津掃部頭二階堂波多野
飯尾肥前入道大和入道齋藤加賀入道飯
尾備中守新加同美濃守等十人皆評定衆
云々

也此外役人飯尾左衛門大夫布施十郎等
也

文安年中御番帳云評定衆攝津波多野二
階堂町野

伊勢貞満筆記云評定衆事外模元と同衆
惣別評定元とハ攝津二階堂波多野町野
等也何れ外模元と分也

年中恒例記云十月亥日コトニ御殿重孫

領之云々由紋之涉儀元同由儀元中略々々
之由部至元接濟以下評定元右切爲也
上色在々名書有々

長祿以來申次記云正月八日評定元波多野

二階堂町野此三人一人元魚目也攝津也

雖為評定元朔日日恭勤之旨々々不出仕也

又云評方涉不横中初而被作身人數事

文明九年十一月廿日大館治於備尚氏由儀元
教氏息

任多庫以彈正少弼左兵衛門佐侍与守
等於江州釣山陣被誅加評定元云々

長享元年常德院殿江州御勤座在陣衆著

到云評定衆二階堂山城判官江波多野因

幡守越州藤原町野加賀守中條大夫判官藤原結

城加賀守藤原

光源院殿御元服記云天文十五年十二月

廿日若君義藤朝臣征夷大將軍從四位下

禁色昇殿宣下有之同日新將軍御評定始

御判始等有之新將軍出御着座元造朝臣
廿ニフヲ持參御座右ノ方ニ被置人數定
賴朝臣二階堂中務大輔有泰朝臣町野左
近大夫將監康定松田丹後守晴秀今度始而被召
也加處元造朝臣也座席之次第新將軍御右
方定賴朝臣著座元造朝臣向定賴而座少
下也定賴之下有泰座有泰下晴秀座元造
朝臣之下康定座中堯連出テ三社ノ夏

披露發言晴秀各合點ノ氣色有テ堯連退
出次ニ評定衆下臈ヨリ立テ皆退出定賴
朝臣モ又退出其後新將軍又御出座定賴
朝臣以下評定衆如前各着座各令披露云
云評定衆又下臈ヨリ退出按元造評定衆乃上首攝津氏
乃上梅松陽以下ハヨリヨリテ
十六條ハ系於將軍家ナリ可司ナリ
清原氏系圖云將繁本名賴將左將監關東
評定衆

上杉系圖云氏定禪正少弼評定衆應永廿三年十月八日於藤澤道場自害

鎌倉年中行事云正月朔日公方様出御御酒參御マイリノ肴ニテ三獻御一家并評定衆召サレ此御祝ニハ宿老中皆御荷用ヲ被申

又云管領對奉公中礼義并書札等之事公方様御役又ハ御一家評定衆ヲハ先坐ハ

請テ其後被出酒一獻之時ハ依時宜先被

始時モアリ中引付衆中以下管領先被出

後有御對面按以上口條ハ鎌倉公方家所司也

南於一寺院不流文龜四年記云當時京兆孫言元上野治郎

少輔秋庭傳中守安富又云郎葉師与一席同与次内後

傳系与寺町太郎左衛門同石見了按一條ハ京於管領細川家所司也

鎌倉大寺紙云系春我々ハ家務職を了承而子忠景

ハ誠道心息ヲ思ヒ立顯定とテ亡企密ヲ存知立録者

つる所百太田乃灌ふいり或お後そ乃灌是とめて
一大事出来ぬと心むりれが政定其前より来りて
りるハ彼ら心をお静く陣中多き其由謀り我れ彼ら
家来被官人ハ狼藉之族逐日今増倍し百定而近自
由強後不可遠く由中といへて止内政始て評定
人とも交り何れも承引せず

東亂記云 太田最 逸政ニハ忠臣多ク勞政

ニハ乱人多キナラヒナレハ上杉家ノ出

頭人評定ノ輩トモ太田ノ入道扇谷ノ執
事トシテヨロツ心ニ任セタル吏ヲ猜ミ
境ニ著テハ吹毛ノ咎ヲ爭テ讒言ニケル
吏度々ナリ 按己上二條ハ關東後
上杉家乃評定人あり

慶長年祿云 其考十八年七月九日代古を仕
大久保十多衛と申勘定方才是より石見評定

佐渡等々金山を以て作身國奉行と評定之元

のなす加判仕之 按己上評定元よりハ
年寄元のみとあり

按評定元を執権とすは政不和序小列れり
政務成評議一萬事をを退せふ主職あり
或は政不和執事同注所執事等を授けしは
引舟政人を帯とて家内官職に准じしは納金
以上はつうじに配してを文官の冠たりけり
小條家の一門りくは大江清系中系に古きれ
諸氏及二階堂藤原ふとの如き文字は場と
諸士は職を世たりたり又三浦子系安達

結城守朝文小田佐木等此とき武門は
名家もす補せり事あり以外も補任せり
評定侍りゆつりまじり軍ありと
ありしはしりせりさしとされしと文字
此家よりされハ父子を職を襲承し事あり
多し三浦子系等諸家の文字れ家よりしり
ふは事小條家といはしりしことありし
政務れ職を世たりしありし
そ人数十五六人ありしは稀なり建長
年中始りて引舟元を並列し及ひて

評定元たるも其子亦先列身元となり後此
元と稱するところなりぬ世家の元といふも
引身元といふて亦補せらるゝものあるも
邂逅の例にて尋常れ事より何れは是利家れ
時よりありても大うに准據あり多れハ中系
三若れ諸流 抄は太田町飛飯尾
布施乃類なり 并二階堂齋藤
波多野等れ族之任に堪ふる者を以ては職に
充られ更は公方れ一門を良石橋山名一及

等れ諸家も命して評定の序に臨し中系
三若等のより列して政務と議定し一はふは
引身元人の職と稱さしむ但當時の制に依り
く一つの家に引身と強ひて亦評定元も
補さふは他姓は諸家をい出せ評定元と
稱しし一等成降をりはく一家の家に初め
秘を諸家と同しく評定元と稱せし中系より
引身のみいひし評定元といふ人より事と

波多野町野舎の族は限らざるありまはとのより
 是格とさしけりあねん程に自れよりも格補し
 補さるるは其家ありぬ人も補任さるるは
 下河原應仁社后の家の事及土佐修永等これ法家も多く
 在る國に在る家ありぬ世格は格は二階堂等
 どのみ評定元元 けはる評定元元とさして宿老とも
 家とさすありけり
 以下今令く長老宿徳の所職ふれはなりはの元
 大永天文の頃とさしけりふ補任さるるは永祿
 元龜の際とさしけりその格謂と一耳

元元あり後歳とくもあは織田氏勃興とく
 是利家職とさすなり及るはこれとくは格れ
 下河原天文の頃とさし評定元の存せしことハ
 本文より引くる光源院殿内元服記
 中よりあり永祿の頃とさし職絶とるは永祿六年諸役附成昭
 將軍諸役附共とさし元元ありて評定元のあきせりて
 是よりして永祿の諸役附は格は掃部頭晴門波多野
 是より外格元の内はあり二階堂山城とさしは神田番元元
 中は載りて是は何れも評定元の範たり義昭將軍元元
 諸役附は二階堂山城とさし晴泰波多野是より通秀共と
 是行元の内はありて格は晴門は外格元の内は載りて是は
 依りておとへん天文とさし評定元を並れりてに永祿は
 至ては其家ありとさし職絶れ
 評定元は是利家より

評定元引付元踐等より一何事も京都此
制に擬きりしなり

式評定衆

建武年間記云奥州式評定衆冷泉源少将

家房式部少輔房英内蔵權頭入道元覺結城上野

入道信濃入道宗廣行珍三河前司親朝山城左衛門

大夫顯行伊達左近藏人朝引付一番信濃入

道下六人畧之二番三河前司下六人畧之三番山城

左衛門大夫伊達左近藏人下五人略之諸奉行

政所執事山城左衛門大夫評定奉行信濃

入道寺社奉行姓名畧安堵奉行侍所按本

之下同安堵奉行侍所按本之下同安堵奉行侍所按本

花營三代記云應安五年正月十一日齋藤

右衛門入道被召加評定衆訖三月四日町

野越前入道可為式評定衆之由被仰出九

日佐々木治部^{高秀}少輔式評定衆出仕始十二
日布施彈正大夫入道可為評定衆之由被
仰出之佐々木治部少輔恩賞方出仕始之
六年十二月廿七日布施彈正大夫入道昌
椿齋藤右衛門入道玄觀可為式評定衆之
由被仰出訖七年六月一日内談番文施行
奉行佐々木大膳^{高秀}大夫右筆布施彈正大夫
入道十一月三日政所執事代事被仰松田

左衛門尉貞秀畢齋藤右衛門尉入道玄觀

所勞之間依令辭退也八年五月廿二日布

施彈正大夫入道為圓覺寺奉行

按佐々木氏ハ初式評定

后ノ補きられて出仕始を勅免日何々々として恩賞方ノ加へ
らるゝあり又々出仕始をいへりなり恩賞方ノ加補
はるゝ時ハ武字を除くゝるゝあり
尚篇末ハ按中ノのゆゑなり

齋藤親基記云文正元年二月十七日河前

河沙法始河産管領洒掃雲禪因州領事次才

野州貞基云良

以上式評定也恩賞
方爲産末河免
御信州忠郷

松丹州秀興肥州三種清承貞為飯多貞
有飯和元連亦四右種基親基亦五名豐基
飯四左為衛依歛樂不亦元治河國通飯形
為備十一月十五日德州詳式詳定元可為
引身元一方内法之方屬元良被申請奉書
希代事也亦日飯尾下總守為數補官同蓋
并政所執事代等被仰身之加式詳定元
已及不申沙法之上志詳式元為引身元可

奉行之旨以伊勢傳中才貞藤被仰出之舍才
肥前守之種沙折檻之間所帶并奉行事等
悉被作身之

又云應仁元年正月廿六日政所内證始於
住宅在之政所内詳定着到伊勢兵庫助執
代雖為式詳定詳之却引身元總序也古者
式詳定元着序也今執事冰式詳定之有歛
飯尾下總守下十七人畧之

政所賦銘引付云寄人松田丹後守秀興明

六十二被 治部河内守國通 文明六十 清和
召加式衆 十七頓死

泉守貞秀 下十五 以上衆文明六正廿六着

座分也 按以上口條々京都
將軍家志所司なり

按式詳定凡ハあるて其詳定元の列ニあり

ふう引身政不同注不執事及詳定なり

等或帯するところなくして要職をハ攝せざるもの

なりされハ例式の詳定ものよりつるさよて式字と

加へられありけ名目穩念殿の時ハ絶てんる

所なく建武記は始ていてよりされと穩念は世も

別了統職なき詳定元を帯し詳定ハ志う呼ぶ

一六と五一成一一これ建武一統の時也陸奥は

能府も詳定引身等元を並れも全く穩念は

例はなほひ一處なれはそ稱呼或も過はる

いふれなけはれなり 此時あるは奉用せられ一也
多くは穩念はなり人志

門族なりはれ 然れも元ハ詳定のころあり
成と思合はし

あむと正一々式字とて職名となせハはれ

武元を辞して引千元還補一神宮開闔
 政不執子代等と急行不変例を以てさ
 あり 思ゆり頃ハ引千元の内或々老境いしを
 けりも病ありて劇物に堪ふ類を以て
 武元はたきゆり 武元を補さるる事
 多うりし事
 文明より後を録すすは早竟揚名志
 職中あり一ありたつて廢絶せしと
 こと半利

寄合衆

北條記云時村建治三年為六波羅弘安五
 年任武藏守同六年下向關東正應二年五
 月為寄合衆正安三年八月為連署
 又云宗宣正應元年任上野介永仁四年正
 月為引付頭同十月為寄合衆同為京下奉
 行同五年七月十日為六波羅南方
 又云久時正安三年為一番引付頭嘉元二
 年任武藏守同三月六日為寄合衆為官途

奉行徳治二年三月出家同十一月卒

又云熙時正安三年為評定衆為引付頭嘉
元三年為京下奉行徳治二年任武蔵守延
慶二年四月九日為寄合衆應長元年十月
三日為連署

按寄合衆といふは執権及評定衆と有る
國政を評議せふつとよしく小條一家の内
其任有あつた人々より補任せら

る可なりとより連綿の職ありははる職は
居り一人亦多かりて穩倉殿の初改ふと宿を
多かりて定まらる職掌なき者といふも其政務
有りつと有りつと評定引付は職掌いときし
後いときふつと評定引付は職掌いときし
後いときふつと評定引付は職掌いときし
後いときふつと評定引付は職掌いときし
の外はとるべきと今推考して其ふに
大方北條貞時執権はけりて役りて不ある

事を公合といひし
ふらありしあり
ふよはふて考ふふ例式ふふ評定れ
席ふらのきまひして公合の席ふはら
ふり内議論定まふはらふなりしふふ
足利殿乃そふらふてハ又ハ職を補きれ
ふふふふふふ

武家名目抄第十冊

源忠常書

